



Title	ハイダ語の手段接頭辞について
Author(s)	堀, 博文; Hori, Hirofumi
Citation	北方言語研究, 1, 1-22
Issue Date	2011-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45227
Type	departmental bulletin paper
File Information	nls-1-01.pdf



ハイダ語の手段接頭辞について*

堀 博文
(静岡大学)

1. はじめに

ハイダ語¹には、動詞に付加される様々な接辞のうち、手段接頭辞 *instrumental prefix* と呼ばれるものがある。手段接頭辞は、その動詞が表わす動作や出来事において用いられる道具やその動作の方法を表わすもので、いわゆる具格の標識や道具名詞を派生するものではない。以下の例²では、動詞語根 *qaa* 「行く」にそれぞれ手段接頭辞が付加されたことにより、その動作がどのような手段で行なわれたかを表わす。

- (1) a. *tləgaay=Gaa='uu t'alaay xal-qaa-gən*
place[DEF]=PP=FOC 1PL.AG INSTR-go-PAST
We went to the place by powerboat. [*xal-*: with engine]
- b. *tləgaay=Gaa='uu t'alaay tləw-qaa-gən*
place[DEF]=PP=FOC 1PL.AG INSTR-go-PAST
We went to the place by boat. [*tləw-*: by boat]

(1a) の手段接頭辞 *xal-* は、「エンジンによって」という意味から拡張的に「モーターボートで」という意味を表わし、一方の (1b) の手段接頭辞 *tləw-* は、「(手漕ぎの) ボートで」という意味を表わす。以下の例も同様に、動詞語根 *kiyəŋ* 「楽器を演奏する」に手段接頭辞 *xud-* 「吹くことによって」、*stlə-* 「指で」が付加され、どのような楽器を演奏するのかが表わされている。

* 本稿の一部は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究プロジェクト「北方諸言語の類型論的比較研究」の第2回研究会(2010年9月)で発表した「ハイダ語の他動性について—手段接頭辞、使役接辞を中心に—」に基づく。その研究会に参加された方々、また、本誌のお二人の査読者には、貴重なご意見や建設的なコメントをくださったことに対し、心よりお礼申し上げたい。

ハイダ語の手段接頭辞については、すでに堀(1997)でその概略を示し、本稿の内容と一部重複するところがあるが、本稿は、旧稿における誤りを正したり、あるいは、不十分な点を補うことも意図している。それらの点については、適宜、本稿の中で言及する。

本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「ハイダ語の形態統語法に関する包括的記述研究」(研究代表者:堀 博文, 課題番号:22520429)の援助による成果の一部である。

¹ ハイダ語は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州北西地域のクィーン・シャーロット諸島とアメリカ合衆国のアラスカ州南東部で話される系統不明の言語である。方言には、大きく分けて、北部方言と南部方言の二種類があるが、本稿では、南部方言のスキドゲイト *Skidegate* 方言を扱う。

² ハイダ語例における略号は、以下の通りである: AG: agentive, CAUS: causative, CL: classifier, DEF: definite, DUR: durative, EMPH: emphasis, EPEN: epenthetic vowel, EVD: evidential, FOC: focus, HABIT: habitual, INCEP: inceptive, INFO: information, INSTR: instrumental, NEG: negative, NOM: nominalizer, OBJ: objective, PL: plural, POSS: possessive, PP: postposition, REFL: reflexive, SG: singular; -: affix, =: clitic, +: compound. グロス中における [] は、形態音韻的規則による変容を示す。

尚、他の資料からハイダ語例を引用する場合は、もとの表記によらず、本稿での表記に改変して示す。

- (2) a. *gaay=dləw 'laa=huu saxophone=Ga xud-kiyəŋ*
 at.that.time 3=FOC saxophone=PP INSTR-play.instrument
 He was playing the saxophone at that time. [*xud-*: by blowing]
- b. *ʔwaa=gyaan 'laa ʔəsəŋ stlə-kiyəŋ*
 and.then 3 too INSTR-play.instrument
 And she was playing the piano. [*stlə-*: with fingers]

このように、手段接頭辞は、動詞で表わされる動作や出来事に関わる手段（道具）やその方法を表わすものであるが、4節でみるように、手段接頭辞が付加されることによって、動詞がとり得る名詞項の数が1つ増えることがあるなど、統語的現象にも関わる要素である。

本稿では、まず、手段接頭辞の形態的特徴と意味的特徴について概観し（それぞれ2節と3節）、更に、統語的特徴として、動詞の結合価の変化をとりあげ、その変化をもたらす要因について考察を加える（4節）。

2. 手段接頭辞の形態的特徴

ハイダ語の手段接頭辞は、如何なる動詞にも付加されるわけではない。ハイダ語の動詞は、語根に様々な接頭辞や接尾辞が付加されて形成されるが、ハイダ語の語根は、接頭辞のうち、手段接頭辞と類別接頭辞をとり得るか否かによって、自由語根と拘束語根に分けられる。自由語根は、これらの接頭辞がなくても使い得るもので、手段接頭辞（の一部）が付加されることはあるが、類別接頭辞が付加されることはない。一方、拘束語根は、これらの接頭辞のうち、いずれか一方もしくは両方を必ず必要とするものである。すなわち、

(3) ハイダ語の動詞語根と手段接頭辞・類別接頭辞の関係

- a. (手段接頭辞)–自由語根
- b. 類別接頭辞–拘束語根
- c. 手段接頭辞–拘束語根
- d. 手段接頭辞–類別接頭辞–拘束語根

(括弧内の要素は随意的。また、それぞれの接頭辞は、その順序で語根に付加される)

自由語根は、語彙的意味がはっきりしているのに対し、拘束語根は、その意味が捉え難く、多くの場合、その前に付加される類別接頭辞や手段接頭辞によって、語幹（すなわち、語根とそれらの接頭辞）全体の意味がはっきりする。以下にあげるのは、拘束語根の一部である（自由語根の例は、上掲の(1)(2)を参照）。

(4) *sgaləŋ*

- a. *xi-sgaləŋ* ‘wave’ (*xi-* ‘with arm’)
- b. *χa-sgaləŋ* ‘wave’ (*χa-* ‘with hands’)

(5) *χuləŋ*

- a. *qyah-χuləŋ* ‘watch’ (*qyah-* ‘by looking’)
 b. *giw-χuləŋ* ‘listen to’ (*giw-* ‘with ears’)

(6) *sgid*

- a. *da-sgid* ‘push’ (*da-* ‘by pushing’)
 b. *dəŋ-sgid* ‘pull’ (*dəŋ-* ‘by pulling’)
 c. *squd-sgid* ‘punch’ (*squd-* ‘by punching’)

(4) の語根 *sgaləŋ* は、腕の一部を振る動作を表わすが、どの部位を使うかは、手段接頭辞によって示される。従って、(4a) の *xi-sgaləŋ* は、腕全体を振る動作を表わし、一方、(4b) の *χa-sgaləŋ* は、手だけを振る動作を表わす。(5) の語根 *χuləŋ* は、知覚に関わる行為を表わすものと考えられ、その知覚に際して用いられる道具や方法が手段接頭辞で表わされる。(6) の語根 *sgid* は、一層、意味の捕捉が難しく、おそらく物が接触するといった意味を表わすのであろうが、実質的な意味は、それに付加される手段接頭辞が担うと考えられる。なお、以下、本稿では、拘束語根は、グロスにおいてスモールキャピタルで示す。

この節では、手段接頭辞の形態的特徴、すなわち、手段接頭辞そのものもつ自在性と、手段接頭辞と自立語との関連性について述べる。

2.1 自在性

手段接頭辞を自在性 *versatility*、すなわち、動詞語根と比較的自由に結び付くことができるか否かという点でみると、その多くがほぼ語彙的に決まっているものの、比較的多くの動詞語根に付加され得るとみられる。とりわけ、自由語根にも付加され得る手段接頭辞は、自在性が高いと考えられる。例えば、手段接頭辞 *gud-* ‘by thinking’ は、拘束語根だけでなく、自由語根にも付加される。以下の (7a) から (7c) は自由語根に、また、(7d) は拘束語根に *gud-* が付加された例である。

- (7) a. *tl’ə ʔwaadləwχan=’uu tləgaay gud-’laa-Gudsdlə-gən*
 3PL all=FOC place[DEF] INSTR-good-very-PAST
 They liked the place very much.
- b. *yen ʔəgən t’alaay gud-sijuu-gən*
 truly REFL 1PL.AG INSTR-slick-PAST
 We thought we were really slick.
- c. *dəwjaay dii gud-haana-ga*
 cat[DEF] 1SG.OBJ INSTR-pretty-NONPAST
 I think the cat is cute.
- d. *huu ’lə=gud-ʔGaʔ-di*
 then 3=INSTR-ROOT-DUR
 Then he was thinking (about it).

更に、手段接頭辞 *tlə-* ‘with hands’ と *kil-* ‘with voice’ は、意味的な適合性が許される限り、かなり多くの動詞に付加される（但し、前者は、1 項動詞に限られるとみられる）。以下の (8) は前者の例である。

- (8) a. *χitəŋ=’uu* *’la* *tlə-Gasdlaay=dləw*
 own.mouth=FOC 3 INSTR-become.open[NOM]=PP
 When he opened his mouth, ...
- b. *Gandlaay* *’la* *tlə-sk’aljuu-gən*
 water[DEF] 3 INSTR-boil-PAST
 He boiled the water.
- c. *gə ta-gaay* *’laa* *tlə-dagaya-gən*
 food-DEF 3 INSTR-bad-PAST
 He spoiled the food.
- d. *’lə=lguxu=’uu* *’əniis* *st’iigaay* *tlə-Gaxa-gyaala-gən*
 3=lung=FOC this sickness[DEF] INSTR-weak-become[EVD]-PAST
 This sickness weakened his lung.

これらの例は、いずれも手段接頭辞の本来の「手で」という意味が薄れ、動詞の項を 1 つ増やすという働きしかもっていないと考えられる（例えば、(8c) であれば、NP *dagaya* 「NP が悪い」に対して NP₁ NP₂ *tlə-dagaya* 「NP₁ が NP₂ を悪くさせる（無駄にする）」など）³

以下にあげるのは、自在性が高いもう一方の手段接頭辞 *kil-* ‘with voice’ の例である。この接尾辞も意味的な適合性が許す限り、多くの動詞に付加することができる。

- (9) a. *dii* *’əsəŋ* *’la* *kil-k’ah-gən*
 1SG.OBJ too 3 INSTR-laugh-PAST
 She made me laugh.
- b. *’laa=’uu* *’lə=kil-qaydən*
 1SG.AG=FOC 3= INSTR-leave[PAST]
 I made him leave.
- c. *gina* *’waadləwχan* *’lə=kil-sq’adga-gən*
 thing all 1SG.AG=INSTR-learn-PAST
 I taught everything.

³ ハイダ語には、使役の接尾辞として *-da* がある。この使役の接尾辞と手段接頭辞の *tlə-* は、機能的に重なり合うところもあり、実際、1 項動詞の場合は、交換可能であることもある（例えば、*χaldaj-giit-da* (be.slave-become-CAUS) と *tlə-χaldaj-giit* (INSTR-be.slave-become) ‘enslave’。但し、その判断は、話者によってゆれがみられる）。また、2 項動詞の場合、許容されるのは、使役の接尾辞の方であり、手段接頭辞の *tlə-* は付加されない（例：*qiy-da* (see-CAUS) ‘show (lit. ‘let NP see NP’)’。しかし、**tlə-qiy* (INSTR-see)）。更に、使役の接尾辞の場合は、使役者 causer は、有生物でなくてはならないが、手段接頭辞 *tlə-* の場合は、無生物が使役者であることも可能である（(8d) 参照）。

この手段接頭辞 *kil-* も動詞に付くことにより、動詞のとり得る名詞項の数を1つ増やしている（例えば、NP *qayd* 「NPが立ち去る」に対して、NP₁ NP₂ *kil-qayd* 「NP₁がNP₂を立ち去らせる」など）。ただ、(8) の手段接頭辞 *tlə-* とは異なり、本来の ‘with voice’ という意味を多少保っており、「NP₁がNP₂に～するようにいう（命令する）」といった意味に近い。⁴

一方、限られた語根にしか付加されない手段接頭辞もあり、それらは、語彙的にほぼ固定している、言い換えれば、自在性が低いものと考えられる。以下の手段接頭辞 *tləy-* ‘by handling’⁵ は限られた語根、しかも拘束語根にしか付かないようである。

- (10) *ʔiisəy tl'ə ʔwaadləwχan ʔəsəy φ tləy-squut-s=gyaan*
 again 3PL all again INSTR-ROOT-NONPAST=PP
 When (they =φ) put all of them away...

同様に、*daw-* ‘with side’ も拘束語根 *χast'a* など限られたものにしか付かないようである。

- (11) *huu gid qawdi='uu machine-gaay 'la dəy-daw-χast'a-gən*
 then after.a.while=FOC machine-DEF 3 INSTR-INSTR-ROOT-PAST
 After a while, he pulled down the machine.

(11) では、*daw-* の前に更に別の手段接頭辞 *dəy-* ‘by pulling’ が付いており、このことから *daw-* が自在性を失い、語幹 *dawχast'a* 全体が語彙的に固定していることが窺える。

(11) のように、語根に2つの手段接頭辞が付加されることは、あまり多くはないが、いくつかそういった場合が認められる。⁶ 例えば、

- (12) *Gandlə taŋaa-s dii=sda φ da-kwah-gyaŋ-gaa-ʔatgiŋ*
 water salty-NONPAST 1SG.OBJ=PP INSTR-INSTR-ROOT-EVD-must
 (He =φ) must have pumped the salt water out of me. [*da-*: by pushing, *kwah-*: by current]

(12) は、まず、水の流れを表わす語根 *gyaŋ* に手段接頭辞 *kwah-* ‘by current’ が付いて、「流れる」という語幹ができ、更に、その前に手段接頭辞 *da-* ‘by pushing’ が付いて「押し流しだす」という語幹がつけられたと解釈できる。尚、この文では、「押し流しだす」行為の担い手（行為者）は明示されていないが、結果的に、その行為者を主語、また「塩水」を目的語としてとる2項動詞となっている。更に、

⁴ 更に、ハイダ語には、このような意味を表わす使役の接頭辞として *giy-* がある。そもそもこの使役の接頭辞 *giy-* と手段接頭辞は、動詞語根に付加される位置（スロット）が異なるため、共起することがあり得る。それ以外にも、手段接頭辞の *kil-* は、使役者と被使役者 *causee* とともに有生物でなくてはならないのに対し、*giy-* は、無生物の使役者を許す点で両者は異なる。また、前者は、被使役者の省略が他動詞の場合のみに許されるが、後者は、自動詞でも被使役者の省略が許される (Enrico 2003: 1116f.)。

⁵ (8) の手段接頭辞 *tlə-* と形式的な類似が認められるので、おそらく語源的なつながりがあるものと考えられる。同様の手段接頭辞に、*tlaga-* ‘by hands’ がある（これも同様に自在性は低い）。

⁶ 堀 (1997) では、この点が見落とされていた。

(13) *tl'ə gud-kun-sgid-s=gyaan tlaan tl'ə ʔwaa-gəŋ-gin*
 3PL INSTR-INSTR-ROOT-NONPAST=PP no.more 3PL do-HABIT-PAST

When they thought they had enough, they quit doing that. [*gud-*: by thinking, *kun-*: with end]

この例では、まず *kun-* ‘with end, point’ という手段接頭辞が *sgid* という語根（上掲の (6) を参照）に付き、語幹全体で「終わる、止まる」といった意味を表わし、更に、*gud-* ‘by thinking’ が付くことによって、語幹全体として「十分あると思う（＜終わりであると思う）」という意味になっている。これら (12) (13) のように、2つの手段接頭辞が共起するのは、[手段接頭辞₁-手段接頭辞₂-語根]のうち、[手段接頭辞₂-語根]がほぼ語彙化している場合に多く、また、[手段接頭辞₁]が自在性の高い場合であることが指摘できる。

以上をまとめると、手段接頭辞の自在性の度合いは、自由語根に付加されるかどうかによるところがあるとみられ、自由語根に付加されるものであれば、それだけ自在性が高いと考えられる。

2.2 自立語との関連性

手段接頭辞の中には、意味的に関連する名詞あるいは動詞と形式的な類似を示すものがある（堀 1997）。以下に示すのは、名詞と形式的な類似を示す手段接頭辞の一部である。

(14) 名詞と類似を示す手段接頭辞

a. <i>giw-</i>	‘with ears’	<i>giw</i>	‘ear’
b. <i>kil-</i>	‘with voice’	<i>kil</i>	‘voice’
c. <i>tləw-</i>	‘on boat’	<i>tləw</i>	‘boat’
d. <i>xal-</i>	‘from heat, with engine’	<i>xaal</i>	‘copper’
e. <i>Gud-</i>	‘with buttocks’	<i>Guda</i>	‘buttocks’
f. <i>k’ud-</i>	‘with lips’	<i>k’uda</i>	‘lips’

名詞と類似する手段接頭辞は、名詞と動詞からなる名詞抱合との関連性を示唆する。ハイダ語における複合語をみると、名詞と動詞からなる複合語は多少認められるものの、生産性はなく、語彙化してしまっているものしかみられない。以下にあげるのは、その一部であるが、抱合された名詞が道具を表わすという例はみられないようである。

(15) ハイダ語における名詞抱合

a. <i>jaad+ʔinaa</i>	(woman+be.married.to)	‘be married’
b. <i>tl’ay+st’a</i>	(dogfish.liver+ROOT)	‘remove dogfish liver’
c. <i>gudəŋaay+st’i</i>	(heart+sick)	‘feel sorry’
d. <i>skuji+gəw</i>	(bone+disappear)	‘be surprised’

一方、動詞と形式上の類似を示す手段接頭辞もある。

(16) 動詞と類似を示す手段接頭辞

a. <i>gud-</i>	‘by thinking’	<i>gudəŋ</i>	‘think’
b. <i>qyah-</i>	‘by looking’	<i>qij</i>	‘see’
c. <i>ʔgi-</i>	‘by digging’	<i>ʔGay</i>	‘dig’
d. <i>xud-</i>	‘from wind’	<i>xuda</i>	‘blow’
e. <i>tʼaaŋ-</i>	‘with tongue’	<i>tʼaaŋ</i>	‘lick’ (cf. <i>tʼaŋəl</i> ‘tongue’)
f. <i>gad-</i>	‘by moving’	<i>gad</i>	‘move, run’
g. <i>naaŋ-</i>	‘by playing’	<i>naaŋ</i>	‘play’
h. <i>qaa-</i>	‘by walking’	<i>qaa</i>	‘walk, go’
i. <i>gu-</i>	‘by burning’	<i>gu</i>	‘burn’

これらの手段接頭辞のうち、特に、動詞と全く同じ形式の (16e ~ i) は、複合動詞との峻別が難しい。

自立語と形式が類似している手段接頭辞には、語としての自立性を欠くものの、音韻的には、ある程度の自立性が認められるものもある。ハイダ語では、/(C)CV/ という音節が自立語の第 1 音節に現われた場合、その母音は、長母音として実現し、かつ、低声調を担うという音韻規則がある。この音韻規則は、/(C)CV/ 型的手段接頭辞にも適用される。

(17) a. <i>gasdlə</i>	[<u>gà</u> :sdll]	‘become open’
b. <i>da-gasdlə</i>	[<u>dà</u> : <u>gà</u> :sdll]	‘open NP by pushing’ (<i>da-</i> ‘by pushing’)
c. <i>gij-da-gasdlə</i>	[<u>gij</u> : <u>dà</u> : <u>gà</u> :sdll]	‘make NP ₁ open NP ₂ by pushing’ (<i>gij-</i> : CAUS)
(18) a. <i>gi-jigid</i>	[<u>gi</u> :dʒi:gi:d]	‘hold’ (<i>gi-</i> ‘by holding’; <i>jigid</i> : ROOT)
b. <i>gij-gi-jigid</i>	[<u>gij</u> : <u>gi</u> :dʒi:gi:d]	‘make NP hold’

(17) は、自由語根 *gasdlə* に手段接頭辞 (17b)、更にその前に使役接頭辞が付いた例 (17c) である。単独で現われた場合 (17a) は、規則に従い、語根の初頭音節 /ga/ が音声的に [gà:] と実現する (すなわち、下線で示した音節。以下、同様)。更に、手段接頭辞 *da-* が付いた場合は、語根の初頭音節のみならず、手段接頭辞も長母音で実現する。このことは、それらの前に別の接頭辞 *gij-* が付いても同様である。一方、拘束語根の場合 (18) は、それに手段接頭辞が付くと (18a)、手段接頭辞のみが長母音で実現し、語根の初頭音節 /ji/ は、長母音とならない。このことは、拘束語根が手段接頭辞と、形態的に、また、音韻的に 1 つの単位をなしていることを示すものと解釈できよう。⁷

3. 手段接頭辞の意味的特徴

これまでみてきた例から明らかなように、ハイダ語の手段接頭辞は、かなり具体的な意味を有する。従って、自由語根に手段接頭辞が付加された語幹全体の意味は、それぞれの構成要素の意味から予測できることが多い。例えば、

⁷ 尚、手段接頭辞に後続する類別接頭辞も同様の音韻的振る舞いをする。

(19) *qaydaay χid=guy 'lə=ʔgu-gaydən*
 tree[DEF] under=PP 3=INSTR-run[PAST]
 He ran to under the tree from fear. [*ʔgu-*: from fear]

(20) *Moresby Island=Gaduu t'alaay tlaw-qaagən*
 Moresby Island=PP 1PL.AG INSTR-go-PAST
 We went around Moresby Island by boat. [*tlaw-*: on boat]

いずれの例も語幹全体の意味が手段接頭辞と語根のそれぞれの意味を合わせたものである
 (「恐れから-走る」, 「ボートで-行く」).

しかし, なかには, 手段接頭辞と語根のそれぞれの意味から予測できないものもある
 (例: *kil-'laa* (with.voice-good) 'thank', *kil-st'i* (with.voice-sick) 'get mad' など).

かなり具体的な意味を有する手段接頭辞のうち, 道具を表わすものを意味の観点から分
 類すると, 大体, 以下のようになる (堀 1997).

(21) 手段接頭辞の意味分類

a) 身体部位

頭, 鼻, 舌, 唇, 耳, 手, 指, 肘, 足, 声, 背中, 肩, 顔 など

b) 自然現象

潮, 風, 熱, 寒さ, 波 など.

c) 人造物

はさみ, ボート, 棒, エンジン など.

更に, 手段接頭辞を有生性の観点から, すなわち, 有生物の行為と関わる道具, あるい
 は, 有生物が引き起こす出来事と, 無生物によって引き起こされる出来事を表わすものに
 分類できる. 例えば, 以下の (22) における *jəd-* 'by shooting' という手段接頭辞は, その出
 来事に関わる行為者 (=節の主語. 以下の (22) から (28) では下線で示す) は必ず人であ
 り, 無生物 (銃や弓など) であることはない. 同様に, 身体部位名称に関わる手段接頭辞
 (以下の (23)) もその所有者が有生物であることから, その出来事に関わる行為者も有生
 物である (但し, (8d) の *tlə-* の用法を参照).

(22) *huu gina=χan gə taa-təŋaay ʔis-'ii-s=gyaan*
 then thing=EMPH some eat-can[NOM] be-INFO-NONPAST=PP
huu t'alaay jəd-q'aat'a-gəŋ-giin-'i
 then 1PL.AG INSTR-ROOT-HABIT-PAST-INFO
 When there was something to be food, we shot it. [*jəd-*: by shooting]

(23) *GudʔGAGAaywaay=gii 'la gud-k'əm-tə-gən*
 chair[DEF]=PP 3 INSTR-CL-ROOT-PAST
 He broke the chair. [*Gud-*: with buttocks]

一方、次の (24) における手段接頭辞 *kwah-* ‘by current/flowing’ は、無生物による出来事を表わすことから、*kwah-* が付加される動詞の主語も無生物である。同様に、(25) の *gu-* ‘by burning’, (26) の *daal-* ‘with the tide’ もそれぞれが付加される動詞の主語は無生物に限られる。

(24) *gəm səŋgaay=χan gə q'aawhūu-gəŋ-s χitii=gii='uu*
 NEG morning=EMPH some get.up-NEG-NONPAST mouth=PP=FOC

ciigəŋ kwah-gya

urine INSTR-ROOT

‘Urine will flow into the mouth of the one who does not get up early in the morning.’

(25) *naagaay='uu gu-hayhūu-gən*

house[DEF]=FOC INSTR-disappear-PAST

‘The house burned up.’

(26) *'laa-ga tləwaay daal-gad-di-ga*

3-POSS boat[DEF] INSTR-move-DUR-NONPAST

‘His boat is drifting away.’

しかし、手段接頭辞が付加された動詞の主語が無生物と有生物の両方の場合もある。

(27) a. *hayiy='uu musəmuus-gaay qaji=?ungu tGaagaay gad-gu*
 instead=FOC cow-DEF head=PP rock[DEF] INSTR-ROOT

The rock hit the cow on the head instead. [*Gad-*: by moving]

b. *q'adaχaay taagun gad-xyaay-di*

offshore spring.salmon INSTR-ROOT-DUR

A spring salmon was jumping offshore.

(28) a. *tləw xud-qaagiy-di-ga*

boat INSTR-go-on.the.water-DUR-NONPAST

A sailing boat is going. [*xud-*: with wind, by blowing]

b. *yan='uu 'lə=xud-sk'a-juu+?iw?an-di*

truly=FOC 3= INSTR-CL-ROOT+big-DUR

He was whistling really loud.

(27a) と (28a) では、無生物（それぞれ ‘rock’ と ‘boat’）が主語であるが、同じ手段接頭辞が用いられた (27b) と (28b) では、有生物（それぞれ ‘spring salmon’ と ‘he’）が主語である。

上の (21) に示した手段接頭辞の意味分類からみると、a) の身体部位は、有生物に関わるものであり、また、c) の人造物も、それらを道具として使うのは専ら有生物（更には人間）であるのに対し、b) の自然現象は、無生物であることが多いとひとまず考えられるであろう（但し、(28) の *xud-* などのように、主語の有生性を問わないものもある）。

手段接頭辞と有生性の関係については、Enrico (2003: 1163f.) も同様の指摘をしており、

Enrico は、それを 1 つの根拠として、手段接頭辞が主語をもつと考える。しかし、Enrico は、(27) や (28) にあげた手段接頭辞のように、それらが付加された動詞の主語の有生性を問わないものがあることを認めつつ、それらの手段接頭辞と主語の関係をどのように扱うのかは述べていない。この手段接頭辞と主語の関係については、5 節で再び取り上げる。

4. 手段接頭辞の統語的特徴

手段接頭辞が付加されることにより、動詞のとり得る名詞項の数に変化が生じる場合がある。本節では、手段接頭辞の付加が動詞の結合価に影響を与えるか否かを、本来の動詞の結合価によって試みる。⁸

ハイダ語の動詞は、とり得る名詞項の数で見れば、0 項動詞から 3 項動詞に分けられ、多くの場合、主語は無標（但し、1 項動詞の一部を除く）であるが、目的語は、動詞によって標識（後置詞）が異なる。⁹ 以下に動詞の分類を示す（[] に示したのは、後置詞の本来の意味）。

(29) ハイダ語の動詞の分類

- a) 0 項動詞 : *dalə* ‘rain’, *xayaa* ‘(the sun) shine’, *hiiləy* ‘thunder’, etc.
- b) 1 項動詞 (NP=主語) :
 - 1) NP *qaa* ‘go, walk’, *na* ‘live’, *skinxa* ‘wake’, *’laa* ‘good’, *xyaat* ‘dance’, etc.
 - 2) NP=*Gii*: CL-*ʔə* ‘break into pieces’, CL-*nənaay* ‘break into pieces’, etc. [*Gii*: into]
- c) 2 項動詞 (NP₁=主語, NP₂=目的語) :
 - 1) NP₁ NP₂¹⁰ : *dəw* ‘invite, get’, *daGa* ‘have’, *gudəy* ‘hear’, *qaqan* ‘meet’, *qiy* ‘see’, etc.
 - 2) NP₁ NP₂=*Gan*: *k’ah* ‘laugh’, *ʔunsəd* ‘know’, *Gaxitda* ‘fight’, etc. [*Gan*: for]
 - 3) NP₁ NP₂=*gi*: *halxa* ‘gather’, *xaw* ‘fish’, *kilxi* ‘need’, *tləGəd* ‘help’, *dayiy* ‘look for’, *ʔGwaaga* ‘afraid of’, etc. [*gi*: to]
 - 4) NP₁ NP₂=*Gii*¹¹: INSTR-CL-*ʔə* ‘break NP₂ into pieces’, INSTR-CL-*nənaay* ‘break NP₂ into pieces’, etc.
 - 5) NP₁ NP₂=*Ga*: *k’uuga* ‘love’, *kijəy* ‘play (musical instruments = NP₂)’, etc. [*Ga*: at]
- d) 3 項動詞 (NP₁=主語, NP₂=間接目的語, NP₃=直接目的語)
 - NP₁ NP₂(=*gi*) NP₃ *giida* ‘give NP₂ NP₃ (= food)’, etc.

(29) にあげた分類のうち、0 項動詞と 3 項動詞は、手段接頭辞をとらない。また、上に述べたように、1 項動詞と 2 項動詞においても、手段接頭辞は、それらすべての動詞に付加され

⁸ 堀 (1997) でもこの点是指摘したが、十分な考察がなされていない。

⁹ これらの後置詞によって標示される名詞句が目的語であることは、例えば、2 項動詞に中動態を派生する接尾辞 *-ga* が付くと 1 項動詞になるが、その時、もとの動詞の目的語がこれらの標識を伴って、派生された動詞の主語となることや、指示対象が主語と同じ場合、再帰代名詞が現われ得ることなどによって示される。

¹⁰ NP₁ と NP₂ の順序は、必ずしも実際の語順を反映するものではない。

¹¹ 目的語が後置詞 =*Gii* で標示されるのは、「壊す」「切る」などの動詞が多く、それらは、語根に手段接頭辞が付加されるものしかなく、語根だけのものはない。

るわけではない。

以下、1項動詞と2項動詞に手段接頭辞が付加された場合の動詞の結合価の変化についてみしてみる。

4.1 2項動詞

2項動詞の場合は、手段接頭辞が付加されても、動詞の結合価に変化は生じない。以下にあげるのは、自由語根の例で、(30a)と(31a)は、手段接頭辞を伴わない場合、一方、(30b)と(31b)は、手段接頭辞が付加された例である（それぞれ主語に下線、目的語に二重線を付して示す）。

- (30) a. tGa saah=gi t̄ə=k'aat'a-gən
 rock upward=PP 1SG.AG=throw-PAST
 I threw a rock in the air.
- b. 'l̄ə=qaji t̄l'ə=q'id-k'aat'aaya-gən
 3=head 3PL=INSTR-remove[EVD]-PAST
 They cut off his head. [q'id-: by cutting]
- (31) a. daaləGaay (dii=sda) 'laa ʔisda-gən
 money[DEF] (1SG.OBJ=PP) 3 take-PAST
 He took the money (from me).
- b. Gaalaaay (ʔwaa=sda) 'laa d̄əy-ʔisda-gən
 lid[DEF] (that=PP) 3 INSTR-take-PAST
 He took off the lid. [d̄əy-: by pulling; NP=sda: optional]

拘束語根の場合は、手段接頭辞を伴わない〔類別接頭辞-語根〕を基本とし、手段接頭辞が付加された〔手段接頭辞(-類別接頭辞)-語根〕（類別接頭辞は随意的）と比べてみる必要がある（類別接頭辞は、動詞の結合価の変化をもたらさない）。例えば、以下の(32a)(33a)は、語根に類別接頭辞だけが付いた場合であり、それ以外の例は、手段接頭辞と類別接頭辞の両方もしくは手段接頭辞だけが付いた場合である。

- (32) a. dii ʔawGa='uu 'l̄ə=t'ak'inga k'u-giy-di
 1SG.OBJ mother=FOC 3=grandchild CL-ROOT-DUR
 My mother was holding her grandchild.
- b. taagunaay t̄ə=Gaad-giy-daal
 spring.salmon[DEF] 1SG.AG= INSTR-ROOT-along
 I towed the spring salmon ashore. [Gaad-: by towing]
- c. Gii='uu gixyaanʔu kaljuu 'la d̄əy-gi-giy-gu
 PP=FOC banner big 3 INSTR-CL-ROOT-PL
 So they hang a big banner. [d̄əy-: by pulling, hanging down]

(32a) は、拘束語根 *giy* (「運ぶ」や「持つ」に相当する) に類別接頭辞が付いているだけの例であり、この例から、この拘束語根がとれる名詞項は、*dii ʔawGa* ‘my mother’ (=主語) と *ʔə=t’ak’inga* ‘her grandchild’ (=目的語) の2つであることが分かる。(32b) は、同じ拘束語根に手段接頭辞 *gaad*-「引っぱることによって」が付いた例、また、(32c) は、手段接頭辞 *dəy*-「引くことによって」と類別接頭辞が付いた例である。(32b) と (32c) のいずれにおいても、手段接頭辞が付加されても動詞の結合価は変わらず、動詞のとり得る名詞項の数は、2つのままである。以下の (33) も、手段接頭辞が付加されていない場合 (33a) と付加された場合 (33b) において、動詞がとり得る名詞項の数は2つのままで変わりはない。

- (33) a. *gəmt’iisqwaay ʔaŋGa ʔlaa gəm-sgulgən-i*
scarf[DEF] own 3 CL-ROOT[PAST]-INFO
She put on her scarf. (Enrico 2005: 518)
- b. *ʔiisəy tʔə ʔwaadləwχan ʔəsəy φ tʔəy-squut-s=gyaan*
again 3PL all again INSTR-ROOT-NONPAST=PP
When (they =φ) put all of them away... [tʔəy-: by handling] = (10)

これら2項動詞に手段接頭辞が付加された例(すなわち、(30)～(33))をみると、それらの手段接頭辞は、それが表わす行為の対象を含意していると考えられる。例えば、(32b)の *gaad*-‘by towing’が表わす行為の対象は、*taagunaay* ‘the spring salmon’ であると考えられ、動詞の目的語と同じである。すなわち、動詞語根が表わす行為の対象と手段接頭辞が表わす行為の対象が同じであることから、手段接頭辞が付加されても動詞の結合価が変わることがないと解釈できる。

2項動詞と2項動詞の複合語においても同様に、前項と後項の動詞は、それぞれの名詞項を共有し、動詞の結合価は変わらない。例えば、

- (34) a. *ʔlaa ʔla qiy-gən* (3 3 see-PAST) He saw him.
b. *ʔlaa ʔla q’utda-gən* (3 3 steal-PAST) He kidnapped him.
c. *ʔlaa ʔla qiy+q’utda-gən* (3 3 see+steal-PAST) He peeped at him.

(34a) と (34b) は、(34c) の複合動詞がそれぞれ単独で使われている場合であるが、いずれの例においても動詞のとり得る名詞項の数は2つのままである。

以上から、2項動詞に手段接頭辞が付加された場合は、動詞の結合価に変化をもたらさないといえる。

4.2 1項動詞

1項動詞についてみると、手段接頭辞が付加されてもとり得る名詞項の数が変わらない場合と手段接頭辞の付加により名詞項の数が1つ増える場合がある。以下にあげるのは、自由語根に手段接頭辞が付加されても、動詞の結合価が変わらず、1項動詞のままの例である(いずれも a は、手段接頭辞を伴わない場合、b [と (37c)] は手段接頭辞が付加され

た場合を示す。また、動詞の項 [=主語] に下線を付す).

- (35) a. *yan='uu 'lə=sgaytə-di-gən*
 really=FOC 3=cry-DUR-PAST
 She was crying so hard.
- b. *yan='uu 'lə=ɬgu-sgaytə-di-gən*
 really=FOC 3=INSTR-cry-DUR-PAST
 She was crying so hard by fear. [*ɬgu-*: from fear]
- (36) a. *gaay=gagən='uu 'lə=k'udʔulgən*
 that=PP=FOC 3=dead[PAST]
 So he died.
- b. *gaay=gagən='uu 'lə=q'ud-k'udʔulgən*
 that=PP=FOC 3=INSTR-dead[PAST]
 So he starved to death. [*q'ud-*: from hunger]
- (37) a. *'la=sda ɬə=qayd-ə-gaay=dləw*
 3=PP 1SG.AG=leave-EPEN-NOM=PP
 When I left from him, ...
- b. *ɬk'yaah=sda='uu ɡandlə k'in=guy t'aləŋ ɬəw-qaydən*
 Windy.Bay=PP=FOC water hot=PP 1PL.AG INSTR-leave[PAST]
 We left Windy Bay to Hotspring. [*ɬəw-*: on boat]
- c. *gaay=gaa ʔəsəŋ t'alaŋ xal-qaydən*
 that=PP too 1PL.AG INSTR-leave[PAST]
 We went there too. [*xal-*: with engine]
- (38) a. *ʔiitl'ə qay-ʔatə*
 1PL.OBJ¹² sleepy-become
 We got sleepy.
- b. *ʔiitl'ə xal-qay-ʔatə*
 1PL.OBJ INSTR-sleepy-become
 We got sleepy from the heat. [*xal-*: from heat]

拘束語根の場合は、上の2項動詞の場合と同様、a) 類別接頭辞-語根と b) 手段接頭辞(-類別接頭辞)-語根を比べてみる必要がある。以下にあげるのは、手段接頭辞が付加されても、動詞の結合価に変化が生じない場合である。

- (39) a. *'laa='uu ɡan-daal-gu-di-gən*
 3=FOC CL-ROOT-PL-DUR-PAST
 They were walking.

¹² 動作性、制御性を表わさない自動詞の主語として人称代名詞が現われる場合、その格は他動詞文の目的語と同じ目的格(OBJ)が用いられる(詳しくは、Hori 2008 参照)。

b. *gud=tawgan* \varnothing *xal-tl'ə-daal*
 each.other=PP INSTR-CL-ROOT
 They (=ϕ) traveled in a fleet. [xal-: with engine]

(40) a. *ciina qwaan q'ay-gij-s=gyaan='uu*
 fish many CL-ROOT-NONPAST=PP=FOC
 When a lot of fish bunched in one spot, ...

b. *'laa-ga cit'iisgw gəwdla-s 'laa gay-gəw-gij*
 3-POSS coat new-NONPAST 3 INSTR-CL-ROOT¹³
 Her new coat was floating. [gay-: by floating]

これら (35) から (40) の例に共通していえるのは、手段接頭辞が語根で表わされる行為あるいは出来事に対する原因（例えば、(35b) の *tGu-* ‘from fear’ や (36b) の *q'ud-* ‘from hunger’ など）、手段（例えば、(37b) の *tləw-* ‘on boat’ や (37c) の *xal-* ‘with engine’ など）を表わす、あるいは、手段接頭辞が行為を表わすものであっても、その対象が含意されない（例えば、(40b) の *gay-* ‘by floating’）という点である。すなわち、手段接頭辞は、語根が表わす行為や出来事を修飾するだけで、動詞語幹（＝手段接頭辞（-類別接頭辞）-語根）全体が 1 つの出来事を表わしていると解釈できよう。

一方、手段接頭辞が 1 項動詞に付加され、動詞がとり得る名詞項の数が 1 つ増える場合がある。以下にあげるのは、自由語根に手段接頭辞が付加された場合である（いずれも a が動詞語根だけの例、対して、b が手段接頭辞の付加された例である）。

(41) a. *'laa gəw-Gu-gən*
 3 disappear-PL-PAST
 They disappeared.

b. *'laa tə=qyah-gəw-Gu-gən*
 3 1SG.AG=INSTR-disappear-PL-PAST
 I lost sight of them. [qyaah-: by looking]

(42) a. *Gawaay=Gaa='uu 'laa qaa-gən*
 bay[DEF]=PP=FOC 3 go-PAST
 He walked to the bay.

b. *Gawaay=Gaa='uu 'laa tə=Gəl-qaa-gən*
 bay[DEF]=PP=FOC 3 1SG.AG=INSTR-go-PAST
 I led him to the bay. [Gəl-: by leading]

いずれの例においても、手段接頭辞が付加されたことにより、目的語（二重線）となる名詞項が増えている。動詞がとり得る名詞項が 1 つ増えたのは、語根ではなく、手段接頭辞

¹³ 上の (32) の語根と同じ形式であるが、とり得る手段接頭辞や名詞項の数において、両者の間には違いがあるので、同音異義形式であると考えられる。

によるものであることは、(36) では語根 *k'udʔut* ‘dead’ に手段接頭辞が付加されても動詞の結合価に変化が生じないのに対し、以下の (43) では、同じ語根に手段接頭辞が付加されて動詞のとり得る名詞項の数が 1 つ増えていることから示される。

- (43) a. *'laa 'lɔ=squd-k'udʔulgən*
 3 3= INSTR-dead[PAST]
 He punched him to death. [*squd-*: by punching] cf. (36a)
- b. *taanaay 'laa jəd-k'udʔulgən*
 bear[DEF] 3 INSTR-dead[PAST]
 He shot the bear dead. [*jəd-*: by shooting]
- c. *'laa 'lɔ=kus-k'udʔulgən*
 3 3= INSTR-dead[PAST]
 He stabbed him to death. [*kus-*: by stabbing]

拘束語根は、上と同様、手段接頭辞が付加されていない場合（以下の a）と手段接頭辞が付加された場合（以下の b）を比べてみる必要がある。

- (44) a. *'laa='uu gan-daal-gu-di-gən*
 3=FOC CL-ROOT-PL-DUR-PAST
 They were walking. = (39a)
- b. *c'aamuwaay ʔəsəŋ t'aləŋ kid-ʔgi-daal-sga-gən*
 log[DEF] too 1PL.AG INSTR-CL-ROOT-to.center-PAST
 We rolled the log out. [*kid-*: by poking]
- (45) a. *gudʔGAGAaywaay=gii k'əm-ʔ-gən*
 chair[DEF]=PP CL-ROOT-PAST
 The chair was broken.
- b. *gudʔGAGAaywaay=gii 'la gud-k'əm-ʔ-gən*
 chair[DEF]=PP 3 INSTR-CL-ROOT-PAST
 He broke the chair. [*Gud-*: with buttocks] = (23)
- (46) a. *sabəlii-gaay=gii k'əm-nənaay-gən*
 bread-DEF=PP CL-ROOT-PAST
 The bread crumbled.
- b. *ʔildagwaay ʔaŋga ʔagwaay=gii q'id-nənaay-t'ajəŋ*
 [proper.name] own halibut[DEF]=PP INSTR-ROOT-try
 Ildagwaay tried to cut her halibut. [*q'id-*: by cutting]

いずれの例においても、手段接頭辞を伴わない場合は、動詞がとり得る名詞項の数は 1 つであるのに対し、手段接頭辞が付加された例では、名詞項の数が 1 つ増えている。尚、(45) と (46) では、手段接頭辞を伴わない場合、主語は、後置詞 =*gii* で示され、一方、手段

接頭辞が付加された場合では、目的語が同じ後置詞で示されている点に注意されたい（上掲の (29) も参照）。

以上、(41) から (46) における手段接頭辞に共通しているのは、対象への働きかけを含意するという点であり、これらの文は、その働きかけの結果、その対象に変化が生じた、あるいは、その対象が動作を行なうことを表わすと解釈できる。例えば、*gal-* ‘by leading’ という手段接頭辞が語根 *qaa* ‘go’ に付加された (42b) の場合であれば、手段接頭辞で表わされる行為が 3 人称代名詞 *'laa* を対象として及び、その結果、その対象が *qaa* ‘go’ という行為を行なうとみることができる。言い換えれば、これらの文は、2 つの出来事、すなわち、手段接頭辞で表わされる出来事とその結果の出来事を表わすと解釈されよう。そして、統語的には、手段接頭辞が働きかけを含意する対象は目的語であり、その目的語が動詞で表わされる動作や状態の担い手（動作者や経験者など）であると考えられる（(46b) における目的語の標識を参照）。

手段接頭辞の働きかけの結果が動詞語根あるいは（拘束語根の場合）[類別接頭辞-語根]によって表わされるということは、例えば、(45a) と (45b) に現われる類別接頭辞 *k'am-* によって示される。類別接頭辞は、自動詞文であればその主語、また、他動詞文であればその目的語となる名詞句の指示対象がどの範疇（主に、有生性、形、大きさなど）に属するか、あるいは、どのような状態にあるのかを表わす要素である。(45a) と (45b) の類別接頭辞 *k'am-* は、細かく小さくなった状態のものを表わし、この場合は、それぞれの文において主語、目的語となる名詞 *gudɬgagaaywaay* ‘the chair’ の状態（すなわち、壊れてバラバラになった状態）を表わしている。すなわち、手段接頭辞 *gud-* ‘with buttocks’ による働きかけの結果、その対象物である *gudɬgagaaywaay* ‘the chair’ が類別接頭辞 *k'am-* の表わす状態になったと解釈できる。従って、「椅子」に対して本来的に用いられる類別接頭辞 *ɬga-*¹⁴ が付加された、以下の (47a) のような文は、結果を含意していないので、不可であると判断される（(47b) は、その類別接頭辞が用いられる場合を示す）。

- (47) a. **gudɬgagaaywaay=gii* *'la* *gud-ɬga-ɬ-gən*
 chair[DEF]=PP 3 INSTR-CL-ROOT-PAST
 He broke the chair. [*Gud-*: with buttocks]
- b. *gudɬgagaaywaay* *ɬga-gudi-gən*
 chair[DEF] CL-ROOT-PAST
 There was a chair.

これまで手段接頭辞が 1 項動詞に付加された場合の動詞の結合価についてみてきたが、1 項動詞+1 項動詞、あるいは、2 項動詞+1 項動詞の複合動詞における名詞項の数の変化についてみる。¹⁵ 以下にあげるのは、1 項動詞+1 項動詞の例である（それぞれの動詞語根

¹⁴ 椅子やテーブル、棚など、主に棒によって組み立てられた構造体の範疇に属することを表わす。

¹⁵ 1 項動詞+2 項動詞の複合動詞の例として、

'lə=qayd+q'utda-gən (3=leave+steal-PAST) ‘He left secretly’ cf. (34)
 があるだけで、他には得られていない。この場合、複合動詞全体の結合価は 1 であるが、他の 1 項動詞+

が用いられている例を b と c に示す)。いずれにおいても、動詞の結合価に変化はない。

- (48) a. *huu dii xaadGa=?ad Bill ?kuxida+gan-xiy-daal*
 then 1SG.OBJ father=PP Bill hurry+CL-ROOT-along
 Then my dad and Bill were walking in a hurry.
- b. *dii xaadGa=?ad Bill ?kuxida-gən*
 1SG.OBJ father=PP Bill hurry-PAST
 My dad and Bill were in a rush.
- c. *dii xaadGa=?ad Bill gan-xiy-daal*
 1SG.OBJ father=PP Bill CL-ROOT-along
 My dad and Bill were walking.
- (49) a. *'lə=saləŋ+Ga-Gudi-gən*
 3=twitch.in.pain+CL-ROOT-PAST
 He lay down in pain.
- b. *'lə=saləŋ-gən* He twitched in pain.
- c. *'lə=Ga-Gudi-gən* He lay down.

これら 1 項動詞+1 項動詞の複合動詞は、後項の動詞が移動 ((48) の「歩く」) や位置 ((49) の「横たわる」) を表わすことが多く、前項の動詞がその状態を表わし、複合動詞全体で 1 つの出来事を表わしていると思ふことができる。

一方、2 項動詞と 1 項動詞からなる複合動詞をみると、複合動詞のとり名詞項は、その構成要素である 2 項動詞のそれと共通している。

- (50) a. *'laa=gi tə=giw-χuləŋ+q'əw-ŋu-gəŋ-gən*
 3=PP 1SG.AG=INSTR-ROOT+sit-SG-HABIT-PAST
 I used to sit and listen to them.
- b. *'laa=gi tə=giw-χuləŋ-gəŋ-gən*
 3=PP 1SG.AG=INSTR-ROOT-HABIT-PAST
 I used to listen to him.
- c. *tə=q'əw-ŋu-gən*
 1SG.AG=sit-SG-PAST
 I sat down.
- (51) a. *'la t'alaŋ qyaanGa+Gaydən*
 3 1PL.AG see[outward]+run[PAST]
 We ran to see him.

2 項動詞の複合動詞でも同様なかどうかは、俄かには判断できない。

b. 'la t'alaay qyaayga-gən

3 1PL.AG see[outward]-PAST (qyaayga < qiy-ga [see-outward])

We went to see him.

c. naagaay=gaa t'alaay gaydən

house[DEF]=PP 1PL.AG run[PAST]

We ran to the house.

このタイプの複合動詞においても、後項の動詞は、位置 ((50) の「座る」) や移動 ((51) の「走る」) を表わすものが多い。また、前項と後項の動詞の意味的な関係は、後項の動詞の表わす動作に続いて前項の動詞の動作が行なわれるというように、2つの出来事を表わすと考えられる (但し、(50a) の場合は、2つの動作が同時に行なわれたものとも解釈できる)。以下の複合動詞の例では、前項の動詞が表わす動作の結果、後項の動詞の状態になったと見做し得る。

(52) a. qaylə-gaay ʔa ʔk'unəy+skunxa-gən

dish-DEF 1SG.AG scrub+clean-PAST

I scrubbed the dish clean.

b. qaylə-gaay ʔa ʔk'unəy-gən

dish-DEF 1SG.AG scrub-PAST

I scrubbed the dish.

c. qaylə-gaay skunxa-gən

dish-DEF clean-PAST

The dish was clean.

この例では、ʔk'unəy 'scrub' の結果、その目的語 qayləgaay 'the dish' が skunxa 'clean' の状態になったと考えられ、全体として2つの出来事を表わしていると解釈できる。¹⁶

以上、まとめると、1項動詞+1項動詞の複合動詞は、1つの出来事を表わし、2項動詞+1項動詞の複合動詞は、2つの出来事を表わすと考えられる。手段接頭辞と関連付けていえば、前者のタイプの複合動詞 (すなわち、1項動詞+1項動詞) は、手段接頭辞の付加が動詞の結合価をかえない場合、また、後者のタイプの複合動詞は、手段接頭辞の付加が動詞のとり得る名詞項の数を増やす場合に相当するといえる。更にいえば、動詞の結合価を増やす手段接頭辞は、1項動詞的というよりも2項動詞的であると考えられよう。¹⁷

動詞がとり得る名詞項の数を増やすか否かによって手段接頭辞を分けると、おおよそ以

¹⁶ 尚、中国語におけるいわゆる結果補語を伴う複合動詞 (例: 「擦干净」(きれいに拭く<拭いてきれいになる)、「咬死」(かみ殺す) など) においても、全体で2つの出来事を表わす (王 1995 参照) など、その用法や統語的な現象がハイダ語の (52) における複合動詞や名詞項の数を増やす手段接頭辞に類似する点があると考えられる。更に、Van Valin and LaPolla (1997: 108) による中国語の結果補語を伴う複合動詞の論理構造も参照。

¹⁷ こうしてみれば、手段接頭辞は、たとえ名詞起源のものであっても、その本質において、動詞的であると考えるのが妥当であろう。

下のようになる（名詞項の数に変化がない場合を0，1項増やす場合を+1で表わす）。

(53) 手段接頭辞と動詞の結合価

0	<i>tay-</i> ‘by lying’, <i>ɬgu-</i> ‘from fear’, <i>tləw-</i> ‘on boat’, <i>gay-</i> ‘by floating’, <i>kwah-</i> ‘by flowing’, <i>xal-</i> ‘by engine’, <i>Gad-</i> ‘by moving’, <i>q’ud-</i> ‘from hunger’, etc.
+1	<i>da-</i> ‘by pushing’, <i>dəŋ-</i> ‘by pulling’, <i>squd-</i> ‘by punching’, <i>jəd-</i> ‘by shooting’, <i>c’i-</i> ‘with scissors’, <i>gud-</i> ‘by thinking’, <i>kid-</i> ‘by poking’, <i>kiw-</i> ‘by tying’, <i>kus-</i> ‘by stabbing’, <i>ɠəl-</i> ‘by leading’, <i>Gud-</i> ‘with buttocks’, <i>q’id-</i> ‘by cutting’, <i>χa-</i> ‘with hands’, etc.

ここにあげた手段接頭辞をみる限り，名詞項の数を増やす手段接頭辞は，その行為の担い手が有生物であり，また，他者に対する働きかけが含意されるものであるとひとまず見做すことができよう。

5. 結語

これまで，ハイダ語の手段接頭辞を形態面，意味面，また，統語面から考察してきたが，本稿で示した解釈が当て嵌まらなるとみられる例がいくつかある。以下，それらを指摘し，今後の研究の課題としたい。

前節において，手段接頭辞の付加によって動詞がとり得る名詞項の数が増える場合，手段接頭辞が働きかけを含意する対象物は，その文の目的語であることを示した。しかし，以下の例のように，文の目的語が，手段接頭辞が働きかけを含意する対象物とはみられない場合もある。

(54) a. *’laa qay-ʔatə*

3 sleepy-become

He got sleepy.

b. *ʔəgən ’laa q’u-qay-ʔatə*

REFL 3 INSTR-sleepy-become

He got sleepy after eating. [*q’u-*: by biting, eating] cf. (38)

(54a) と (54b) を比べると，(54b) では，手段接頭辞が付加されたことにより，名詞項が1つ増えている。しかし，(54b) の目的語である再帰代名詞 *ʔəgən* は，手段接頭辞 *q’u-* ‘by biting, eating’ の含意する対象物とは考えられない。この種の例において，再帰代名詞以外の目的語も現われ得るのか確かめる必要がある（上掲の (38) では，再帰代名詞が目的語として現われず，動詞がとり得る名詞項の数は1つのままである）。

同様に，以下の例でも，手段接頭辞が付加されたことにより，名詞項が1つ増えているが，手段接頭辞 *dəŋ-* ‘by pulling’ が含意する対象は，目的語の *tləwaay* ‘the boat’ というより，*sk’agi* ‘dog salmon’ とみるのが自然である。

- (55) a. (*sk'agi=?ad*) *tləwaay st'ah*
 (dog.salmon=PP) boat[DEF] full
 The boat was full (with dog salmon). [*sk'agi=?ad*: optional]
- b. *sk'agi=?ad tləwaay ?aŋGa t'alaay dəŋ-st'ah*
 dog.salmon=PP boat[DEF] own 1PL.AG INSTR-full
 We filled our boat with dog salmon. [*dəŋ-*: by pulling]

前節の (53) で示したように、手段接頭辞は、動詞の結合価をかえないタイプと1つ増やすタイプに画然と分けられるわけではなく、同じ手段接頭辞がある場合には名詞項の数を増やし、またある場合には、名詞項の数に変化をもたらさないことがある。¹⁸ 以下の例を参照されたい。

- (56) a. *taagunaay ?əsəŋ sda-t'axuy-di*
 spring.salmon[DEF] too INSTR-ROOT-DUR
 Spring salmon was kicking around, too. [*sda-*: by kicking]
- b. *'laa 'lə=sda-k'ud?ulgən*
 3 3=INSTR-dead[PAST]
 He kicked him to death.
- (57) a. *tləw xud-qaa-giy-di-ga*
 boat INSTR-go-on.the.water-DUR-NONPAST
 A sailing boat is going. [*xud-*: with wind, by blowing] = (28a)
- b. *taajwaay qaydaay xud-q'aa-gən*
 wind[DEF] tree[DEF] INSTR-fall-PAST
 The wind blew down the tree.
- b'. *qaydaay q'aa-gən*
 The tree fell down.

いずれも a の例では、現われている名詞項の数は1つであるのに対し、b の例では、同じ手段接頭辞が付加されているながら、名詞項の数は2つである。(56a) の拘束語根 *t'axuy* は手

¹⁸ これに関連して、査読者より、結合価が変化しないということは、すべての動詞について調べない限り、そのように結論付けられないのではないかという指摘を受けた。ここにあげた例は、出典が示されているものを除いて、筆者が得たテキストあるいは話者から聞き出し得たものであるが、査読者の指摘する通り、それらの例を帰納的にみる限りにおいて、動詞の結合価に変化を与えない手段接頭辞があるとしかいえないであろう。例えば、ここで結合価に変化を与えないとした手段接頭辞の1つ *tləw-* ‘on boat’ に関していえば、以下のように、*tləw ?iwjuu* ‘a big boat’ を目的語としてとることはできず、後置詞 *=gu* ‘on’ を伴わなくてはならないことから、動詞の結合価に変化を与えないといえる(上掲の (37b) (42a) と比較)。

- i) **tləw ?iwjuu t'alaay tləw-qaa-gən*
 boat big 1PL.AG INSTR-go-PAST
- ii) *tləw ?iwjuu=gu t'alaay tləw-qaa-gən*
 boat big=PP 1PL.AG INSTR-go-PAST
 ‘We went on a big boat’

同様に、他の動詞あるいは手段接頭辞に関しても、やはり更に広範に調べる必要がある。

手段接頭辞で表わされる動作をでたらめに行なう（この場合であれば、足をばたつかせる）といった意味を表わすと考えられるが、おそらく特定の対象を含意する必要がない（すなわち、*sda-* が「蹴る」というよりも足を使った動作を表わす）ために (56a) では 1 項のままであると解釈できる。この点については、対象を含意する他の手段接頭辞が付加された例を更に集めて確認しなくてはならない。一方、(57b) の主語 *taajwaay* ‘the wind’ がなくても文として成立する可能性があり、この点も確かめる必要がある。

Enrico (2003: 1167) は、上の (54) に類する例（すなわち、目的語に再帰代名詞が現われる場合）や (56) に類する例（すなわち、同じ手段接頭辞が付加されながら、動詞の結合価が変わったり、変わらなかったりする場合）をあげ、手段接頭辞は、目的語をもたないとし、更に、手段接頭辞の有生性と関連付けながら、手段接頭辞は、主語をもつと結論付けている（同 1163f. 尚、3 節参照）。「主語をもつ」あるいは「目的語をもたない」という Enrico の主張するところの意味がその記述からは分かりにくい、「主語をもつ」というだけでは、手段接頭辞の付加によって動詞の結合価が変わったり、変わらなかったりする場合があることが説明できないのではないかと考えられる。また、(45b) における類別接頭辞のように、目的語となる名詞句の指示物の結果の状態を表わす要素があることも、手段接頭辞が対象を含意することを支持するといえよう。但し、手段接頭辞が対象を含意する、あるいは、含意しないという点に関しては、とりわけ複合動詞と関連付けて、より精緻な分析をする必要がある。

また、手段接頭辞の付加によって動詞がとり得る名詞項の数が増える場合は、文全体が 2 つの出来事を表わし、一方、名詞項の数が変わらない場合は、文全体が 1 つの出来事を表わすという解釈を示したが、この点を形態統語的観点、すなわち、動詞を修飾する副詞句のスコープや動詞複合体を構成する要素のスコープ、あるいは、否定文における否定のスコープなどを考慮に入れて、その解釈の妥当性を検討する必要があると考える。

参考文献

- Enrico, John (2003) *Haida syntax*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- (2005) *Haida dictionary: Skidegate, Masset, and Alaskan dialects*. Alaska Native Language Center / Sealaska Heritage Institute.
- 堀 博文 (1997) 「ハイダ語スキドゲイト方言の手段接頭辞について」、宮岡伯人・津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』第 3 号: 43–61, 京都大学大学院文学研究科。
- Hori, Hirofumi (2008) Semantic motivations for split intransitivity in Haida. 『言語研究』第 134 号: 23–55, 日本言語学会。
- Van Valin, Robert D., Jr. and Randy J. LaPolla (1997) *Syntax: Structure, meaning, and function*. Cambridge University Press.
- 王 紅旗 (1995) 「動結式述補結構配価研究」、沈陽・鄧定欧 (主編) 『現代漢語配価語法研究』: 144–67, 北京大学出版社。

Instrumental Prefixes in Haida

Hirofumi HORI
(Shizuoka University)

Haida has instrumental prefixes that are attached to a verbal root in order to denote the instrument (such as “with ears” or “with lips”) and the manner (such as “by pulling” or “by poking”) whereby an action is performed.

Morphologically, instrumental prefixes are not added to all verbal roots; their versatility varies from the ones that can be applied to a relatively limited number of roots to those that can be added to a fairly high number of roots. Instrumental prefixes of low versatility appear to be restricted to bound roots that require instrumental prefixes and/or classifiers, while those of high versatility can be added to free roots that can be used without these prefixes.

Syntactically, instrumental prefixes are concerned with verb valence. When added to a two-argument verb, they do not affect the verb valence. When added to a one-argument verb, however, some instrumental prefixes affect the verb valence to derive a two-argument verb. This depends on the transitivity implied by the instrumental prefixes; thus, those instrumental prefixes that can imply the target of action increase the valence, while those that do not imply it do not affect the valence.

(ほり・ひろふみ jjhori@ipc.shizuoka.ac.jp)